

近代思想史研究における雑誌メディア

中野目 徹

はじめに

シンポジウムの趣旨にもあるように、思想史研究におけるメディアの問題は、学問としての思想史学の方法とも関わらせて改めて問われるべき課題だといえよう。なかでも近代・現代特有のメディアである雑誌は、同時代の新聞や他のメディアと較べてみても、思想伝達の媒体として相性のよいものであると考えられる。本報告に付託された課題は、近代国民国家形成期——主として明治期——における思想と雑誌メディアの関係を明らかにすることで、それを大正期以降の大衆社会状況のなかでその関係がいかに変容

していくのかという問題——次に登壇する佐藤卓己氏に付託されている課題——へと架橋していくことである。

近代のメディアをめぐる歴史学的研究は、新聞研究を中心として戦前期に開始された。雑誌についても、明治文化研究会のメンバーによって相応に研究が蓄積され、その成果の一部が東京大学の明治新聞雑誌文庫に継承されていることは周知のとおりである。戦後における近代史研究の隆盛は、とりわけ明治期の結社と雑誌、例えば明六社と『明六雑誌』、民友社と『国民之友』、政教社と『日本人』など、個々の雑誌メディアをめぐる大きな進展を見せながら今日に至っているといえよう。^{①②}さらに、メディア史研究や読書行為の研究なども、歴史学や社会学、旧来の書誌学な

どからの自立を図りながら、新たな視点に立った傾聴すべき多くの業績を挙げつつある。^③

しかしながら、これまでの思想史研究においては、その方法論と関わらせながら雑誌を読み込むような研究動向は比較的微弱であったといわざるをえない。前近代の思想史研究が厳密なテキスト批判に基づいてテキストの読み自体を競い合う次元でなされているのと較べたとき、近代思想史研究がどれほど自律した学問領域を確立しえているかどうか、いささか心もとなない思いを抱いてきたことは事実である。そこで、本報告では、そのような不安の解消を指す試みの端緒として、三つの課題に即して検討を加えていきたい。

第一に、前近代を専攻している方々を巻き込むことのできる議論の前提を構築するために、近代日本における雑誌メディアの変遷を概観しておくこと。第二に、近代思想史研究の方法論を意識しながら、雑誌メディアに思想を問うための視角のいくつかを具体的に提示すること。第三に、生涯を雑誌記者として終始した三宅雪嶺（一八六〇～一九四五）を例に挙げ、思想主体が雑誌に文章を書き続けることの意味を問い、あわせて佐藤氏が「メディア人間」とする野依秀市と三宅との接点を模索してみたい。三題晰めいて上手くまとまるか自信はないのだが、全体を通して報

告者の属する日本史学の立場から、史料学に依拠した近代思想・史学の方法を意識して論じていくことにする。

一 近代日本における雑誌メディアの変遷

近代以前にも「雑誌」と名のつく書物は散見されるが、欧米の *magazine* を意識した雑誌としては、やはり柳河春三が創刊した『西洋雑誌』（慶応三年）を嚆矢とする。^④ 内容を見ても、幕府開成所系の翻訳新聞とは少し違って、一応論説らしい文章が掲載されている。しかしこれは長続きせず、明治七年（一八七四）に創刊された『明六雑誌』をもって我が国近代における本格的な雑誌発行の画期と見なしてよからう。^⑤ 同時期に『文部省雑誌』『共存雑誌』『報四叢談』さらに福澤諭吉の『家庭雑誌』なども相次いで創刊されている。これ以降明治十年代にかけては、いわゆる明治国家体制の形成期で、多くの日刊新聞が政治を議論し、あるいは新思想を表出する場として中心的に機能した。それに対して、中村敬宇の『同人社文学雑誌』や中江兆民の『政理叢談』なども含めて、この時代までに発行された雑誌は形態上も『明六雑誌』のスタイル（判型Ⅱ現在のB6程度、用紙Ⅱまだ一部では和紙を使用、分量Ⅱ一〇～二〇頁前後、不定期刊）を継承する、一見粗末なメディアとして出発した

といえよう。

明治二十年代に入ると、新聞法令や出版法令の整備とも相まって政論雑誌と専門雑誌の区別も画然となり、徳富蘇峰の民友社から刊行された『国民之友』や志賀重昂・三宅雪嶺らの政教社から刊行された『日本人』などが、隔週刊・週刊で毎号数千部から一万部を超える発行を続けた。

『国民之友』が表紙に Nations's Friend と印字し、『日本人』が「国粹」を Nationality としたように、これらの雑誌の読者としては国民意識の高い知識青年層や在地のリーダー層が想定される。『日本大家論集』をはじめ『保守新論』『政論』『文』『学』『天則』など同時期に発行された雑誌の多くは、『哲学会雑誌』や『国家学会雑誌』などの専門雑誌も含め、A5判や菊判で数十頁の分量がある。雑誌は、国政を論じる場として明治二十三年（一八九〇）に議会が開設された前後のこの時期になると、政治論を中心に社会、経済、教育、宗教などさまざまな分野を論じる媒体として大きく発展したのである。

そのような明治期の雑誌界に革命的な変革をもたらしたのが、明治二十八年に博文館から創刊された『太陽』であった。判型こそA5判であったが、隔週刊で毎号三百頁近くの分量があり、口絵写真も多く、何より内容が論説、時事、歴史、文芸、家庭、工業、農業、海外まで、あらゆる

分野に及んでいる。いわゆる総合雑誌（この名称は昭和期になって発生した）の誕生である。発行部数も当初の二、三万部から最大で十万部にまで達した。報告者はかねてより、日本における国民国家形成の画期として日清戦争の結果たした重要性を考えてきたが、雑誌『太陽』の創刊と成功はそれを立証する一つの根拠となる事象である。やや先回りしていえば、大正期以降の『中央公論』『改造』あるいは『雄弁』『解放』『日本評論』など、毎号五百頁を超えるような月刊雑誌の並立状況は『太陽』に淵源する。

そうしたいわゆる総合雑誌の系譜とは別に、日露戦争前後になると経済雑誌、女性雑誌、少年・少女雑誌など、読者に応じた雑誌のジャンルが確立してくる。野依秀市が主宰し、三宅雪嶺が毎号執筆した『実業之世界』もそのようなジャンル別雑誌の一つであった。一方で、大正十四年（一九二五）、ラジオ放送の開始と同時に講談社から刊行された雑誌『キング』は毎号百万部の発行を続け、新たな大衆雑誌の時代の幕開けを知らせるものといわれる。それが、『家の光』などとともにも総力戦体制下の全体主義的な思想傾向といかに接続することになるのか、佐藤氏の報告にまちたい¹⁰（以上の指摘は、メディア史の概説書や展示会の図録等と大きな違いはないが、本報告ではすべて雑誌の原本をもって説明した。これが次節につながる報告者の立場でもある）。

二 雑誌メディアに思想を問う

はじめにも述べたように、思想史研究を歴史学研究の一部と見る立場からすれば、その基礎には史料学が据えられべきである。¹² こうした立場を前提とすれば、思想を問う対象である雑誌も文献史料の一つということになる。文献史料のなかでも、内容情報の定着性という視点から見ると、書籍と新聞の中間に位置し、外延には金石文やピラ、広告、ポスター等のメディアが存在し、同時代においては、ラジオやテレビ、映画や写真などの差異も意識しなければならぬだろう。さらに、雑誌の周辺には公文書や私文書、書簡や日記など多くの史料の存在が想定される。

雑誌をそうしたさまざまな史料の一つとして史料学の対象とするならば、史料学の常道として、所在情報の確認↓整理・保存措置↓目録作成↓史料群としての構造把握↓個別史料の批判↓史料内容の解釈というプロセスに沿った調査手順が必要となる。言葉を換えれば、最良のテキストを特定するためには、史料の原本が作成され保存されてきた一連の経過を把握したうえで（伝来論）、それらがいかなる構造をもった史料群の一部なのかをふまえて（構造論）、はじめて批判と解釈が成立するという常識である。しかし、

近代の思想史研究では、史料——ここでは雑誌の原本（複製版）やデジタル・データ——に比較的容易にアクセスできるため、あまりこの常識が意識されることなく雑誌に思想を読み解くことが行なわれてきたといわざるをえない。

右のような基本的認識をふまえて、より具体的に雑誌メディアに思想を問おうとするとき、まず、雑誌のメディアとしての特質を考慮すべきであろう。雑誌は記者や寄稿者の原稿を、編集者が編集し印刷所に入稿して製作が開始されるが、この間に出版社の方針や統制機関による検閲も介在する。次に、読者が雑誌を手にする方法には、直接購読による場合は通送によって入手するか、取次を通して書店の店頭に並んだものを購入するか、あるいは図書館等で閲覧する場合などがありうる。右のような作者から読者に至る過程において、雑誌が書籍や新聞とは共通点をもちながら、書籍とはとくにエディタースhipの面で、新聞とは流通経路において違いがあることがうかがえる。

本報告では、必ずしも体系化を目指したわけではないものの、これら雑誌発行の受容の各段階に応じて(1)作者の意図、原稿料、(2)編集の度合い、(3)外的要因として①印刷技術や用紙の問題、発行部数、②出版法規と検閲の実際、③書店や図書館の分布などを挙げ、さらに読者論、読書行為にも言及した¹³。もっぱら紙幅の関係で、ここでは一例の

みに止めるが、『明六雑誌』第十一号掲載の中村正直「西学一斑続訳」七丁表には図のように「道ニ」という二字を行間に入れ木した本（テキスト）があり、これに気づかなければ意味がわかりにくくなってしまふ恐れがある。¹⁴ いまや『明六雑誌』にはUSBメモリーに入った底本の明示されていないデジタル版まであり、その宣伝文句には「研究効率が飛躍的にアップ！」と謳われているが、自分自身への反省も込めていえば、近代思想史の研究者が「効率」ばかり考えて当然行なうべき史料の精査をおざなりにしている場面はないといえるだろうか。また、最近の読者研究は、主として統計資料やアンケート資料を活用して興味深い論点を提示しているが、思想史研究には踏み込まない地点に留まっているように思われる。¹⁵ 以上述べてきたことからいえば、思想史においては読書ノートの分析や本への書込みの分析というレベルで研究を進めるべきであろう。

コノ革新ノ上帝致與リ
ソノ默示ノ道^コ 驚リ人心ノ
レヲエレーシヨシ
除キタレバコノニツノ

『明六雑誌』第11号、7丁表
(部分)

三 雑誌記者・三宅雪嶺

最後に、明治十年代から昭和二十年までおよそ六十年間にわたって、一貫して雑誌メディアを思想表出の場とし続けた稀有な存在である三宅雪嶺（本名雄二郎）という人物を取り上げて、思想主体と雑誌メディアの関係について検討を加えてみたい。もとより雪嶺思想の内在的評価に及ぶ余裕のないことをお断りしておく。¹⁶

雪嶺は幕末期に金沢で生まれ、やがて上京して明治十六年（一八八三）に東京大学文学部哲学科を卒業した。在学中から新聞や雑誌に執筆を始め、自伝によれば「時事の是非得失」を「評論」したくなり、同二十一年に同志と政教社を結成し雑誌『日本人』を創刊することになった。末兼八百吉（宮崎湖処子）によれば「画策の時代」から「文章の時代」へ転じたとされる同時期、官界や学界での成功が約束されていた彼らの多くが、新聞や雑誌の記者を選択した点が重要である。報告者は、この記者転身までを思想の形成期と見なし、以後、『日本人』『亜細亜』に筆を執りつつ『真善美日本人』『我観小景』『王陽明』などの初期著作を発表する日清戦争期までが雑誌記者雪嶺の第一の画期と考えている。

その間、大隈条約改正反対運動や対外硬運動と深く関わり、また『太陽』に寄稿するなかで、雑誌記者雪嶺の時代社会とのスタンスも決まっていたと思われる。日清戦争後に書かれた文章のなかで、「一貫の気風」「思想の独立」を説くようになったことに報告者は注目している。『太陽』の政治論説担当を外れた後には、今後は「多数の読者を貪る」ような文章は書かないとまで断言している。雪嶺は生涯、主筆と見なされる雑誌に書き続けたが、それらの経営にタッチしたことはなく、この点が陸羯南や徳富蘇峰との大きな違いである。その後、明治三十五〜三十六年に洋行し同三十九年に『宇宙』（これ以降、自伝では「更に多く年月を要する者」とされる総合哲学体系の構築作業が開始される）を刊行したころ、すなわち日露戦争前後になると雑誌記者としての雪嶺の声望が確定し「無敵の記者」と称されるようになった。同じころ、『実業之世界』を創刊した野依秀市や、『婦人之友』の羽仁もと子と出会うことになる。

もつとも、洋行に出る前の明治三十二年（一八九九）に生れた二男當次の出生届に父親の職業を「無職業」¹⁹と書いているので、雪嶺が記者としてどれほどの自覚を有していたのかは、慎重に見きわめていく必要がある。また、明治四十年に新聞『日本』と『日本人』が合併する以前、書簡史料によると雪嶺は毎日のように日本新聞社に出勤してい

たようであるから、佐藤氏が三宅と野依を「書齋的賢人」と「街頭の愚人」¹⁹と評しているのは、それ以降の雪嶺のイメージであろう。この二人を看板寄稿者と雑誌経営者と見た場合、明らかに相互依存関係が成立しており、雪嶺の思想評価において避けては通れない課題を提供している。

大正期になると、雪嶺は本拠地の『日本及日本人』に精力的に執筆したほか、野依や羽仁の雑誌をはじめ『中央公論』『改造』などにも頻繁に寄稿する「斯界ノ耆宿」と見られる位置にまで達した。「新しい思想」への理解も示し、黎明会にも名を列ね、森戸事件の特別弁護士やソ連承認論の弁士を務めるなど、時代状況に合わせて言論活動の幅を広げた。

しかし、大正十二年（一九二三）、政教社の内紛から『日本及日本人』を離れ個人雑誌『我観』（のちに『東大陸』と改題）を刊行するところになると、なお新聞や雑誌への精力的な寄稿は続けていたものの、次第に回想や自伝記事が増え、後に『同時代史』となる歴史叙述の連載が結果としてライフワークとなった。そうした一方で、女婿中野正剛の政治運動とも関わりをもつなど世俗的な関心も維持し、戦時下には大日本言論報国会の役員にも就任しており、時局追隨的な言論が目立つようになる。主筆としての論調と掲載雑誌の傾向の一致、不一致に着目しながら、晩年の言論活動

まで含めた雪嶺の思想的評価が、報告者にとって現在の課題の一つである。

おわりに

最初に概観したように、近代日本における雑誌メディアの変遷は、思想表出の場として独自の展開を示してきた。

『明六雑誌』から明治二十年代の『国民之友』『日本人』までは、雑誌を創刊した個人又は集団の個性が雑誌の誌面にそのまま出ており、思想史研究の対象として個別に取り上げられてきたといえよう。しかし、いわゆる総合雑誌として『太陽』が創刊されると、総体としての雑誌は文字通り「総合的」に研究せざるをえず、それ以後刊行された総合雑誌系の雑誌が思想史研究の対象となる場合、特定の執筆者の論説に注目されるのが通例である。したがって、雑誌『青鞥』を例に挙げればわかりやすいが、思想史研究の対象としてはジャンル別雑誌や戦時中の個人雑誌（例えば正木晃の『近きより』や桐生悠々の『他山の石』など）が検討されてきたといえる。

では、今後の近代思想史研究において、雑誌メディアをいかに取り扱っていくべきか、確実にいえることは、執筆、編集、印刷、検閲、流通、受容等の各過程に即した個別研

究をより一層精緻に行なう必要がある。思想史研究が歴史学はもとよりメディア史研究や書誌学、読書研究等の方法を学んでいく必要があることは言をまたない。思想評価の精度を上げるためには、調べればより明らかになることをそのまま放置することが許されないことは、改めて述べるまでもないことである。

一例だけ挙げると、三宅雪嶺は明治三十五年に初めて見たヨーロッパ（フランス）の印象を妻の龍子（花圃）に宛てて「概ね予想の通り又は一、二割劣り候」と書き送ったが、雑誌『日本人』第一七二号（同年十月五日付）の香川怪庵執筆の「風聞録」に紹介されたときは「想像よりは二割劣れるやに思はる」とされているのである。雑誌記事だけを鵜呑みにすると随分違った印象となってしまう。ここではやはり、書簡の有する一次史料としての価値を優先させるべきであろう。雑誌を史料として見たとき、記事の内容は歴史学的に十分な批判を加えなければならない。

そのうえで、雑誌メディアに思想を問う場合は、研究者の関心に応じてさまざまな問い方があるというしかない。個人にせよ集団にせよ思想主体に関心がある場合、むしろ読者の受容の仕方に関心がある場合、その間の検閲の実態に関心がある場合など、対象によって注目する局面もアプローチの方法も異なってくるのは当然のことである。また、

思想の何を評価しようとするのか、かつて丸山真男氏が分析的に述べたように思想のもつ幅や影響力の広さなのか、思想の凝集性というか論理的密度の高さなのか、従来から思想の機能と構造といわれている側面が、これには関わっているであろう。さらに、思想から何を論じるのか、問題史的な思想史研究においては、雑誌どうしの比較による論敵の特定などが主要な関心事になってこよう。さまざまな問い方があるにせよ、雑誌から思想を読み解く場合の共通の前提についてこの報告では述べたつもりである。

最後に、生涯を雑誌記者として終始した三宅雪嶺に即していえば、雑誌との関わりを国民国家形成やファシズム化といった大きな物語の一部として説明することは可能だが、報告者としては、雪嶺個人の思想が思想交換の器としての雑誌メディアと深く関連して展開したと考え、「時事の是非得失」の「評論」と「更に多く年月を要する者」とされた原理的思索の関連を視野に収めつつ、研究を継続していきたい。

注

(1) 明治文化研究会編『明治文化全集』一九雑誌篇(初版は一九二八年、日本評論社)の改題及び年表、同研究会か

ら発行されていた『明治文化』『新旧時代』『明治文化研究』等を参照。

(2) 『明六雑誌』の全号は右記『明治文化全集』に収録されていたし、山室信一・中野目徹校注『明六雑誌』全三冊(一九九〇～二〇〇九年、岩波書店)が刊行され、河野有理『明六雑誌の政治思想』(二〇一一年、東京大学出版会)も上梓された。『国民之友』『日本人』も全号の複製版がある。『国民之友』を発行した徳富蘇峰の民友社については、三一書房から関係資料集も刊行され、それに関わった和田守氏や有山輝雄氏らによる研究が蓄積されている。『日本人』を発行した政教社に関しては基本資料が散逸しているが、拙著『政教社の研究』(一九九三年、思文閣出版)及び『明治の青年とナショナリズム』(二〇一四年、吉川弘文館)ではその克服を目指した。後述するように、『太陽』についてはCD-ROM版の登場によって研究が進展した。

(3) 外山滋比古氏や前田愛氏による先駆的な研究がなされたあと、フランス・アナール学派のロジェ・シャルチエの『書物から読者へ』(一九九二年、みずす書房)が翻訳刊行されたところから、そのような研究動向は顕著になったように思われる。例として永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(一九九七年、日本エディタースクール出版部)と佐藤卓己『『キング』の時代』(二〇〇二年、岩波書店)を挙げておく。また、メディア史研究会が二〇一五年の研究大会で

「歴史史料としてのメディアを考える」、一六年に「読者研究の史料と方法」を取り上げたことは注目される。

(4) 佐藤卓己『天下無敵のメディア人間』(二〇一二年、新潮社)。

(5) 前掲(1)の『明治文化全集』雑誌篇の巻首に覆刻されている。西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』(一九六六年、至文堂) 三三頁。

(6) 同右西田七八頁。あわせて前掲(2)の『明六雑誌』上巻拙稿解説「明六社と『明六雑誌』」及び拙稿「文明開化の時代」(松尾正人編『明治維新と文明開化』二〇〇四年、吉川弘文館)をご参照いただきたい。

(7) 前掲(2)拙著のほか、民友社に関しては同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』(一九七七年、雄山閣)、西田毅ほか編『民友社とその時代』(二〇〇三年、ミネルヴァ書房)等の論集が刊行されている。

(8) 『太陽』については、鈴木正節『博文館』『太陽』の研究』(一九七九年、アジア経済研究所)及び鈴木貞美編『雑誌』『太陽』と国民文化の形成』(二〇〇一年、思文閣出版)参照。

(9) 『中央公論』に関しては、嶋中雄作編『回顧五十年』(一九三五年、中央公論社)をはじめ各年史のほか、中央公論社編『中央公論総目次』(一九七〇年、同社)が、『改造』に関しては、関忠果ほか編『雑誌』『改造』の四十年』

(一九七七年、光和堂)があるが、まとまった研究の対象にはなっていない。最近の竹内洋ほか編『日本の論壇雑誌』(二〇一四年、創元社)では、竹内氏が主として戦後の『中央公論』を論じている。

(10) 『キング』については、前掲(3)佐藤著のほか、講談社の社史や創業者野間清治の伝記を、『家の光』に関しては、(須賀田正雄)『家の光五十年の人と動き』(一九七六年、家の光協会)参照。

(11) なかでも印刷博物館編『ミリオンセラー誕生へ!』(二〇〇八年、東京書籍)が優れている。

(12) 史料学については、拙著『近代史料学の射程』(二〇〇〇年、弘文堂)があるが、同書は公文書研究の方法を示したものであり、新聞や雑誌など活字メディアの史料学構築は今後の課題であるといえよう。前掲(3)のメディア史研究会の大会報告である長尾宗典「史料としての雑誌」(『メディア史研究』第三九号、二〇一六年)参照。

(13) 参考となる研究の一例として、作家の原稿料刊行会編『作家の原稿料』(二〇一五年、八木書店)を挙げておく。

(14) 写真で掲げたのは東京女子大学図書館所蔵本。前掲(1)の『明治文化全集』では「黙示ノ悖り」となっている。

(15) 前掲の永嶺氏は『モダン都市の読書空間』(二〇〇一年、日本エディタースクール出版部)のあとがきで、「具体的で実証的な読書の社会史に「ある種の物足りなさ」を

覚える」とし、「読書という人間の内面そのものに関わる文化的営為の歴史はどのように書かれるべきか、難しい課題である」(同書二六一～六二頁)と述べている。

(16) 以下の三宅雪嶺に関する叙述は、前掲(2)拙著及び『近代史料研究』誌に連載した拙稿「三宅雪嶺伝記稿」その他に基づいており、本稿では紙幅の関係から逐一引用の出典を明示しないことをお断りしておく。

(17) 末兼八百吉『国民之友及日本人』(一八八八年、集成社書店) 九六頁。

(18) 三宅雄二郎「出生届」(流通経済大学三宅雪嶺記念資料館保管「三宅雪嶺関係文書」)。

(19) 前掲佐藤『天下無敵のメディア人間』 八八頁。

(20) それは前掲(8)鈴木編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』の基礎となった国際日本文化センターにおける研究会が「総合雑誌太陽の総合的研究」と称していたことからも理解されよう。

(21) 拙稿「三宅雪嶺の洋行」(『近代史料研究』第一六号、二〇一六年)をご参照いただきたい。

(22) 丸山真男「思想史の考え方について」(武田清子編『思想史の方法と対象』一九六一年、創文社) 参照。

(筑波大学教授)